

法士会報

発行所：法政大学デザイン工学部
都市環境デザイン工学科 同窓会
〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-33
TEL・FAX (03) 5228 1406
発行人 吉田 保
編集人 会報編集委員会

大学同窓会ならではの絆の構築を

法士会(都市環境デザイン工学科 同窓会)会長 吉田 保



一昨年の政権交代以降、震災復興、国土強靱化のための国土防災や維持管理事業が活発化し、さらに東京オリンピックが追い風となり、建設業界の好況は当面継続する見通しですが、喫緊の課題は人材不足です。行政、民間のゼネコン、コンサルを問わず、人材が不足し、予算が確保されていても不調の仕事が相次いでいるのが現状です。さらに、働く若者の減少は、少子高齢化の進展する我が国にとって、全産業共通の課題であることを考えると、現在の我々の業界における人材不足は決して一過性のものとは言えません。また、若手社員の離職率も増大傾向にあります。これは、景気のよし悪しとは別に、終身雇用や忠誠心に拘らずより条件の良い職場を求める欧米流の合理的な考え方が浸透しつつあることに起因していると考えられます。

発生し、その度に、やり場のない悩みを抱えることは往々にしてあります。そんな時、案外、頼りになるのが同窓生ではないかという気がします。同じ業界なので仕事の悩みに対する理解度がある一方、仕事上のしがらみがないので、掛け値なしで本音で悩みを打ち明けられます。相談を受ける側も、同じ出自を持つ者として、その苦勞がダイレクトに伝わるので同じ心境を共有することが出来、親身になった対応をしたいという気持ちになります。私も、何度か同窓の先輩の助言に救われその有難味を感じたと同時に、逆の立場で後輩の相談にも応じた経験があります。同窓会には、そんな、会社にも家庭にも相談できない悩みを抱えると言った、人生の岐路に立った時、相談を持ち込める場としての、セントラルステーション的役割もある気がします。

このような社会状況を反映してか、最近ワーク・ライフ・バランスという言葉がよく耳にします。言うまでもなく、ワークは生活の糧として仕事、ライフは生活、即ち、家庭やプライベートなどの仕事以外のことを意味し、ワークー辺倒からライフを大切に生活スタイルへの変換を呼びかける言葉と解釈されます。例えば、戦後から高度成長期までは、衣食住に必要な給与や雇用条件が企業を選択する際の最大の関心事でしたが、成熟社会に移行しつつある今日は、勿論、生活に必要な基礎的条件の重要性は変わりませんが、働きやすく、ストレスの感じられない職場環境が重要視されてきているように感じます。確かに、我々の周囲を見回すと、昔に比べ、様々の原因のストレスで心身に支障をきたす若者が増加している傾向があるのは事実です。しかし、その主要因は、必ずしも、残業が多くライフに割く時間がないためではない気がします。勿論、生理的に必要な睡眠時間が取れないようでは不味いですが、長時間仕事に没頭し傍から見ると大丈夫かと思っても意外と本人は平気で、興に乗って過度のストレスになっていないことがありますし、反対に時間的には短く大したことはないと思っても本人にとっては大変なストレスになっている場合もあります。このように、心身ともに健康で澁澁と仕事に取り組む上で、時間がバロメーターとして有効なことは間違いありませんが、万能ではなく、心の問題は個人差も大きく、むしろ、人間関係などに起因するストレスの方がはるかに大きく影響しているように思われます。

定年の年を迎えると、不思議と小中学校や高校の同窓会(同期会)が頻りに開催されるようになります。これらの会合に出席することは、昔を懐かしむというそれなりの良さがありますが、それ以上に発展することは中々ありません。それに対して、大学の同窓会は、お互い似通った職業なので、年次を超えて新たな交友関係が構築されたり、それが発展し仕事上の新たな展開に繋がるとか、先輩から再就職先を紹介されるといった具体的解決策が見つかる例も珍しくありません。ただし、そのような良さ交友関係は、普段からの同窓会活動を通じて顔見知りとなり、同窓生としての信頼関係がベースとして築かれ、お互い気心が知れていることが前提となります。

社会人として年齢を重ねるにつれ、仕事上のトラブルや、顧客や上司との人間関係、あるいは家庭内でも家族間の様々な問題が

3年前、同窓会長を拝命した時、三つの目標を立てました。会員の増強とネットワークの強化、大学との連携の強化、外部への情報発信です。この内、2番目の目標に関しては、初年度、前年に引き続き大学と共同で外堀清掃を実施し、翌年から現役学生の就職活動の支援を目的に初めての試みとして学生との意見交換会を開始しました。そして、昨年の2回目は、「キャリアデザイン研究」という正式な大学のカリキュラムの中に組み込んでいただき、学部、修士含め100名を超す学生、OB40名余りの参加を得て意見交換会を無事成功裏に終えることが出来ました(この詳細は山田理事の寄稿を参照されたい)。この他、毎年1~2回の割合で定期開催し昨年度20回目を迎えた社会工学セミナー等の活動を通じて、大学との連携強化については一定の成果が得られたと自負しています。

しかし、1番目の会員相互のネットワークの構築と、第3番目の外部への情報発信に関しては、必ずしも十分な取り組みが出来ませんでした。次期体制においては、これらの課題への対応も含めた精力的な活動を通じ、大学の同窓会ならではの良さが醸し出て、いざという時に頼りになる同窓会が構築され、会員相互の絆が深まることを期待しています。

都市環境デザイン工学科の現況

都市環境デザイン工学科 教授 溝 渕 利 明



溝渕利明先生

2007年にデザイン工学部が誕生し、翌年には当学科も長年住み慣れた小金井を離れ、市ヶ谷田町に本拠を移し、早6年が過ぎた。2013年3月には、デザイン工学研究科の修了生も卒業し、工学部都市環境デザイン工学科の最後の一人が2014年3月に卒業予定であり、小金井の解体前の校舎で学んだ学生もいなくなることになる。

学科の教員は、デザイン工学部となつてすでに6人が新しく加わり、半数以上の教員が小金井の以前の校舎で教鞭をとったことがないことになる。別に昔を懐かしんでいる訳ではないが、つい数年前まで小職が最年少の教員であったのに、今では年齢もほぼ中間、在籍年数からいえば上から数えた方が早くなつてしまっている。隔世の感は否めないのも事実である。

歳をとったせいかもしれないが、月日の経つのがとても早く感じられる。教員の平均年齢もデザイン工学部発足当初は、当学科が60代半ばであったのだが、現在では50代前半（52歳）であり、一世代分若くなつたことになる。

ちなみにデザイン工学部の他学科では、建築学科が54歳、システムデザインデザイン学科が58歳であり、都市環境デザイン工

学科がデザイン工学部の中で最も教員の平均年齢の若い学科となった（建築学科もかなり教員が入れ替わって、若くなつている）。デザイン工学部発足以降に着任された先生方は、高見公雄教授（2009年4月着任、都市プランニング系、都市デザイン研究室）、鈴木善晴准教授（2010年4月着任、環境システム系、水文気象環境研究室）、福井恒明教授（2012年4月着任、都市プランニング系、景観研究室）、藤山知加子准教授（2012年4月着任、施設デザイン系、複合構造研究室）、酒井久和教授（2013年4月着任、環境システム系、地盤環境工学研究室）、道奥康治教授（2014年4月着任予定、環境システム系）の6名である。

当学科は、2004年の学科名称の変更後女子学生が増え、特にデザイン工学部となつて市ヶ谷に本拠を移した後は、例年定員の約2割が女子という状況になっている。学科名称と場所だけではないかもしれないが、都市、環境というキーワードと都心にキャンパスを構えたのが女子学生増加の大きな要因の一つと思っている。それを受けてというわけではないが、2012年には当学科初の女性教員である藤山先生にきていただいた。土木女子は、これからの建設分野を支えていく大きな原動力と期待されているので、当学科でも現状に甘んじず更に女子学生を増やしていくための広報活動を行っていきたいと思っている。

2013年4月に着任された酒井先生は、2013年3月に退任された草深名誉教授の後任として広島工業大学から赴任されてこられた。専門は地盤地震工学で、研究テーマは、ライフラインの地震時信頼性評価、土構造物の地震による崩壊現象の解析的検討などである。

2014年4月に着任予定の道奥先生は、先年逝去された故岡教授の後任として神戸大学から赴任される予定である。

ちなみに、6名の先生方のうち4名が京

都や大阪が出身大学であり、学科教員の構成が西高東低になってきた。これは、西の方の大学や企業と連携を強める好機と捉えて当学科の更なる飛躍の礎にしたいと思っている。

デザイン工学部発足に際しては、クォーター制や3学科共通科目の導入、第二外国語の廃止などかなり先進的なカリキュラム構成を行い、さらに3年までの進級基準を無くすなどした。しかしながら、3学科共通科目が学科独自のカリキュラム構成に必ずしも合致していない点や、進級基準を緩めたことで4年生になって卒業要件を満たすためにほぼ毎日講義を受けて、卒業研究がままならない状況の学生が多かつたことから、2011年度にカリキュラム、進級基準などの見直しを行い、2014年度でようやく完成年度を迎えることになった。昨今の学生をみていると、ゆとり世代なのかかわからないが、自由度を与えすぎても上述したようにだらけてしまうし、かといって締め付けすぎでは委縮してしまうので、締め付けすぎないように、抑え付けすぎないように指導していかねばならず、かなり苦勞している。

2013年3月には、草深先生、牧野助手が大学を去られたが、2014年3月には長らく学科事務の面倒を見て頂いた堀さんが退職される。誰に対してもいつも明るく接しられ、学生に対しても親身になって相談にのっておられる姿がとても印象的であった。多くの卒業生の方たちもお世話になったのではと思う。事務室から堀さんがいなくなるのはとても寂しい限りである。

アベノミクスによる経済効果、2020年に開催されるオリンピックに伴うインフラの再整備や本格化する東日本の復興事業など建設業界にとっては追い風となつてきている昨今であり、我々も質の良い学生を輩出できるよう教育・研究を進めるとともに、更に精進をしていきたいと思っている。

山門明雄先生のご逝去を悼む

都市環境デザイン工学科 名誉教授 草深 守人

本学名誉教授の山門明雄先生は、平成25年8月22日に胃癌のためご逝去されました。享年92歳でした。

先生は大正9年11月に東京でお生まれになりました。昭和21年9月に東京帝国大学第一工学部土木工学科をご卒業後、(株)間組に入社されましたが、当時日本において耐震設計の必要性が認識され始めたことから、ただちに同社より東京帝国大学第一工学部土木工学科吉田研究室に派遣され、コンクリート構造物の耐震性評価と設計技術に関する研究に従事することになりました。しかし「戦後の首都東京の復興は地震に耐えられる社会資本を整備することが建設に携わる技術者の使命である」という恩師の言葉に強く刺激を受け、昭和22年7月に同社を退職すると同時に創和建築設計事務所に入所し、耐震工学を実構造物の設計に取り入れる際の問題点の分析と解決および設計技術者の教育普及に従事されました。その後、土を力学的に解釈する学問分野が欧米において急速に発展したことに危機感をつのらせ、昭和27年に土質基礎調査所(現・基礎地盤コンサルタント(株))を創設することになりました。また同時に、土木・建築構造物の設計や施工に関連する土質工学的諸問題が工学の一分野として社会に認識される必要性を感じ、土質工学会の創設に奔走し、今日の地盤工学会の地位を築き上げる一翼を担われました。昭和32年4月には、法政大学工学部土木工学科に専任講師として着任し、翌年4月には助教授に昇格後、同37年4月に教授に任ぜられ土質基礎工学の教育・研究に従事されました。在任中は工学部長、法政大学理事、同常務理事を歴任するなど、平成3年3月に定年退職されるまでの長きにわたり教育・研究の普及に努めた功勞により同年4月に法政大学名誉教授の称号が授与され、さらに同6年秋の叙勲において勲三等瑞宝章を授賞されました。

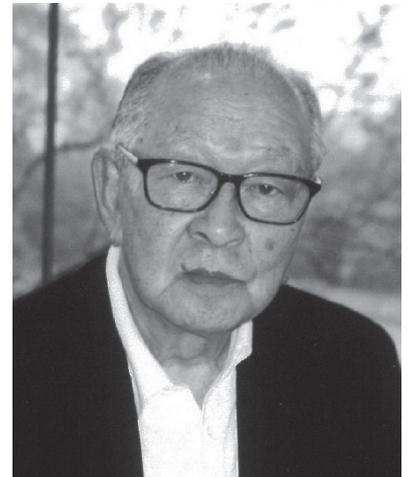
法政大学退職後も財団法人土木研究センターの審査委員会委員や財団法人砂防・地

滑り技術センターの砂防技術・技術審査証明委員会委員を務めるなど、引き続き技術の向上と普及に努めておられました。平成25年秋の叙位叙勲においては、生前の先生の類まれな社会貢献に対して正五位の称号が授与されました。

ふりかえれば、先生が法政大学に着任してまもない昭和30年代は学問分野を問わず予算面でも実験設備面でも決して十分とはいえない時代であったように思います。このような時代にあつて、学生にどのようにして土を工学的に理解させるか、多くの戸惑いと苦心の連続であったはずですが、先生の教育に対する熱意と行動力から、他大学に先んじて、当時の日本の工業技術では製作できなかった土の三軸圧縮試験機をスウェーデンから導入し、学生の指導と試験技術の確立にあたられました。後にこの試験機と試験技術は土質材料のせん断強度に関する試験法の標準として位置付けられ、日本の土質力学が力学の一分野として今日の地位を築き上げるに至った大きな礎となったように理解しています。先生の教育・指導は、常に今日的あるいは将来的な社会的要請に即応できる実践的な技術者を育成することに腐心しておられたように思います。例えば、理論が優先されがちな土質力学の講義においても、学習する理論が実際の設計や施工現場で発生する技術的問題の解決にどのように工夫され応用されているか、常に具体的事例を示しつつ講義されていた姿に私たち学生は深く感銘を受けた覚えがあります。

大学の運営面では、昭和55年に工学部長に就任し、工学部多摩校舎の建設と小金井校舎の教育研究設備の改善等を担ったほか、同59年より学校法人法政大学理事、同61年より同常務理事としてキャンパス移転に伴う通勤・通学上の交通手段の確保など重要な学内問題の解決に尽力され、あわせて私立大学における教育振興にも寄与されました。

先生の功績は新技術開発やその普及活動



山門明雄先生

にも及び、特筆すべきは、昭和40年前後に欧州で開発されつつあったアースアンカー工法にいち早く着目し、ドイツ・フランス・イギリスを中心に同技術の現状調査に赴き、帰国後は関連学会を通じてその有効性の啓蒙に努め、同時に日本の土質条件と建設環境に即した技術として確立するための研究・開発を行い、今日のアースアンカーの発展の礎を築かれました。今日では本工法は広く一般的工法として全国に普及し、土木・建築構造物の建設工期の短縮、工費の低減、ひいては社会基盤の充実と安全な国土の整備に大きく貢献しました。

さらに、以上のような教育・研究・技術の普及活動に加えて、昭和28年には土質工学会理事に就任し、以後同学会参与や論文審査委員等を歴任し、同49年5月には土木学会理事に就任するなど若手研究者の育成や学会の拡充・発展に努められました。また、昭和42年には建設省宅地防災委員会、同57年には労働省中訓審技能検定部会専門調査委員会など数多くの公的機関の委員として広く活躍することにより我が国の社会基盤の整備に尽力され、その功績から昭和54年には土質工学会功勞賞を受賞しています。また、これらの長年の功勞により平成4年には土木学会名誉会員、同5年には土質工学会名誉会員の称号が授けられました。

キャリアデザイン研究

『OBと学生との意見交換会』の報告

昨年実施した『OBと学生との意見交換会』のレベルアップを目的に本年は、授業の一環として大学3年生を対象として、学校と同窓会の共催で平成25年10月26日に開催しました。

今回は、昨年度の意見交換会後のアンケート結果を基に、学生にとって就職活動の羅針盤になってもらうため、第一部のパネルディスカッションと、第二部の業種別での自由意見交換会で実施しました。

当日は母校の学生のため、40名以上のOB・OGが参加して下さいました。まず、大学キャリアセンターから昨年度の就職実績とこれから始まる就職活動の心構え等の基調講演を行い。その後、社会の第一線で活躍されているOB・OGによるパネルディスカッションを行ないました。パネルディスカッションでは、事前アンケートに対する回答という具合に進行しましたが、パネリストの本音のトークに多くの学生が聞き入っていました。第二部では、各業種別に分かれてそれぞれのOB・OGが、学生が抱えている就活の不安・疑問や勉強方法などに対して分かり易く真摯に回答しており学生にとっては、良いアドバイスになっていたと思います。

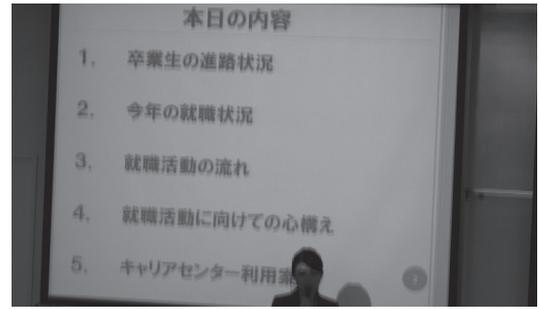
全体で4時間を予定しておりましたが、予定時刻を過ぎても多くの学生が、OB・OGに対して質問等をしてなかなか閉会することができず、最終的には強制的に終わらせてしまい、学生には申し訳ないと思っております。

最後に、今回の反省点を来年度の『OBと学生との意見交換会』へとつなげ、最終的には、『学生と社会』の橋渡しになるような会にしていきたいと考えております。

理事 山田 誉 (1991年卒)



第2部 業種別意見交換会



意見交換会式次第



第1部 OBによるパネルディスカッション



第1部 OBによるパネルディスカッション (講聴風景)



第2部 業種別意見交換会

社会工学セミナー

社会工学セミナーはOBの皆様の学生時代の友との再会の場、社会での情報交換の場として開催してきており、平成25年度は第20回目の開催の運びとなりました。

今回は、都市環境デザイン工学科に新たに着任された酒井久和教授と本学OBの山田啓介氏の両名にご講演をいただき、下記のとおり開催しました。

日時：平成25年7月8日 18時30分開始

講演：①ライフラインの地震時被害想定手法

②東北縦貫線建設工事

(新幹線上空でのPC・鋼桁架設)

OBの皆様、教室の先生方および学生に多数参加していただき、質疑応答も時間をかなり超過して活発に行われました。講演後の懇親会も盛り上がり、OB間の交流や先生方との意見交換を行うことができました。今年も去年と同時期に開催する予定ですので、多数のOBの皆様がご参加され、より一層この社会工学セミナーが活用されますことを願っております。

理事 中村 徹 (1978年卒)



編集後記

草深先生の記事にもありましたとおり、昨年夏に山門先生がお亡くなりになられました。

92歳とは思えぬご活躍で昨年3月に行われた草深先生・牧野先生の退職パーティーでの元気なお姿を思うと今も信じられない想いです。

さて、東京オリンピックも決まり、景気も上向き感があるなか、土木業界としては明るい話題が多いと思います。しかし、逆に人材不足も生じ大きな問題となっているのも実感として深刻です。また若者の土木離れ等……。ここで大切なことは先輩方が積み重ねてきた技術の継承と「土木が好き」という人材を育てあげること。われわれの大きな課題です。

法士会編集委員 山川宏明 (1984年卒)